

## 前期赤松氏の城郭と拠点形成

山上雅弘

はじめに

「ひょうご歴史研究室」では平成二七年四月の発足時より赤松氏と山城研究班において八年間にわたって佐用町・上郡町・たつの市をフィールドとして研究を行なってきた。主な現地活動としては佐用町の国史跡利神城跡、上郡町の赤松地区、たつの市の城山城跡などがある。このうち前期赤松氏に関する活動としては平成二八〜三〇年にかけて上郡町教育委員会の赤松居館跡の発掘調査の支援、国指定史跡白旗城跡の現地踏査、令和二・三年度のたつの市教育委員会との城山城の共同現地調査がある。

この一連の調査によって前期赤松氏の拠点の構造については文献研究と赤松居館跡の発掘調査、城郭については現地踏査によって新たな知見を得

ることができた。そこで本稿ではこの成果の内、主に考古学に関わる調査について成果を紹介したい。

### 一、前期赤松氏の拠点『赤松』と守護所研究

#### (1) 赤松の研究史

赤松<sup>①</sup>についての研究は高坂好氏や藤本哲氏の研究が先駆的である。一方、城館研究からは昭和五〇年代後半の『兵庫県の中世城館・荘園調査』・『日本城郭大系 第12巻』において松岡秀夫氏（松岡秀夫一九八一・一九八二）が赤松居館・白旗城・苔縄城などを紹介している。また、『上郡町史』では多田暢久氏が苔縄城・白旗城・赤松居館を紹介している（多田暢久一九九九）。ただこれらは『赤松』全体を捉えたものではなく文献の性格上、個別要素の紹介が中心となる。一方、

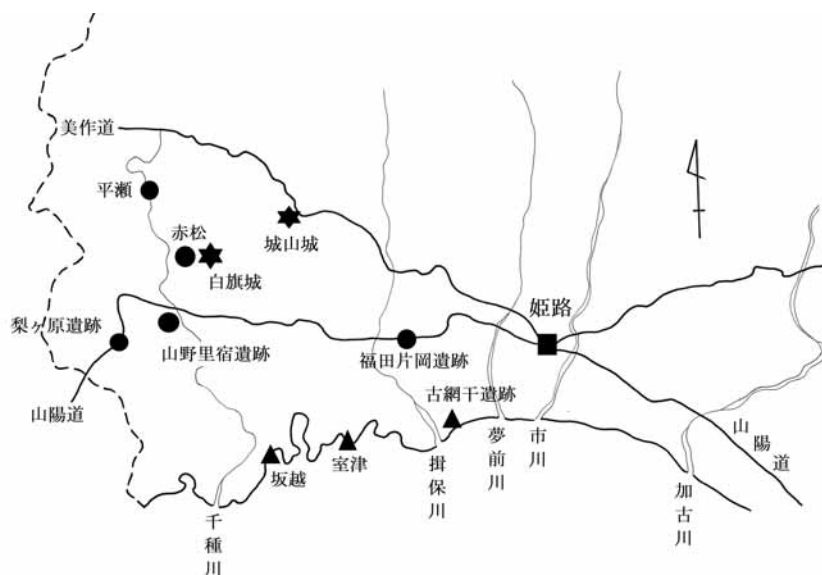


図1 西播磨周辺位置図

居館を城館と評価するが（荻能幸二〇一六）、現在のところ赤松居館において防御構造を肯定できる要素はない。また、今回の赤松居館跡の調査では居館西側の土塁状遺構が近代以降に構築されたことも判明している。

赤松の空間構成の視点から見ただけのものとしては、山上雅弘の報告がある（山上雅弘二〇〇四）。さらに荻能幸氏も『備前・白旗城・赤松居館について見解を示している。ただ、赤松

次に守護所とされる「赤松」の場を考えるために守護所の研究動向を確認しておきたい。守護所研究の先駆的なものとしては松山宏の全国的な検討がある（松山宏一九八一）。一方、考古学・文献などの各分野の研究者が加わった学際的なものとしては一九九三年度日本考古学協会シンポジウム（金子拓・前川要編一九九四）や二〇〇六年の岐阜の守護所シンポ、二〇一〇年尾張の守護所シンポなどがある。

これらの学際的研究では全国的に守護所の様相が把握され大きな成果を上げた。しかしその結果明らかになったのは、多くの事例が戦国時代に盛期を迎えること、考古学的な成果では大半が一五世紀後半を遡らないというものであった。つまり守護大名が活躍した南北朝時代～室町時代、特に一四世紀の守護所については判然としない状況が鮮明になったのである。こういった事情から遺跡から見た一四世紀代の守護所研究は低調なまま推移してきたというのが実情であろう。

(2) 南北朝時代の守護所の実態

ところで守護所について松山宏氏が(松山宏一九八二)「鎌倉時代になると、国府と並び、あるいはそれに代る地方支配の権力の拠点となる所が出現する。是が守護所である。」「守護所はむろん守護権力の所在地である。」と述べるように、当初の研究では守護所は国の支配拠点であることを念頭に進められてきた。さらに、守護所は戦国期城下町の初期形態という認識から、支配拠点としての居館を中心に城下構造(武家・寺社・都市・市)などに関心が向けられてきた。<sup>(2)</sup>

こういった認識に対して小林基伸氏は守護所をあえて拠点と呼び、播磨における赤松守護家の拠点は、京都を「分国支配の最高決定機能」の場とし、「赤松が家集団の長、城山が軍事統率者、坂本が領域支配者」と述べて、播磨では守護機能が分散した形態を持つことを指摘した(小林基伸二〇〇六)。つまり「赤松」は則祐を始祖とする惣領家の家結合の中核機能を担う場であり、城山城は軍事的な防衛拠点であるとして、必ずしも領国支配機能を体现する場ではないというのである。

大村拓生氏の一連の研究でも、赤松の地の由緒に則つて、赤松一族が整備・造営に関与するもの、主体は赤松則祐が惣領家の正当性を示すことを目的に荘厳化することにあつたとする(大村拓生二〇一七・二〇一八・二〇二〇)。

また、山田徹氏は南北朝期(一四世紀)の守護所について、遺跡として明確な姿を示さない場合が多いとし、顕在化する事例としては寺院創建や、一時的な下向などにより判明する場合があるという。そして、赤松氏のように本領的な所領が、守護所として見えやすいが、その場合は必ずしも領域支配を目的としない。このため一国のなかの中心的な位置にあるとは限らず、その選地も荘園制との関係から守護の影響力のおよぶ範囲に限定されるという(山田徹二〇二二)。

このように近年の文献研究からみると、南北朝期の領国の守護拠点は、家の継承や軍事的な機能を担う場所において顕在化することが多く、そこは必ずしも領国支配の決定権をもつ場所ではないという。従つて領国全体を押さえる地理的な条件や、経済的な要衝に関わらないことも想定する必

要があるという。

### (3) 赤松の概要と由緒

現在の赤松村は山間の小規模な盆地にある集落で、周囲には標高四〇〇～五〇〇mの山々が囲む。文献史料が残らなければどこにでもある平凡な農村とみられる場所である。また、近世以降の赤松村は、小規模な集落を指すが、中世の赤松は宝林寺や苔縄も含む広い範囲を含む（小林二〇〇六）。この意味では「赤松」は赤松居館のほか、宝林寺・苔縄寺・栖霞寺・赤松八幡・五社宮、白旗城・苔縄城などから構成される南北一五km、東西一kmの範囲となる。

赤松は円心・則祐期の寺院建立や居館建設・築城などによって整備が進められたが、特に則祐期の整備が大きいとされている。則祐は宝林寺、白旗城、赤松居館を築くなど造営に力を注いでいる。ただし、赤松がその後も拠点として意識され、後世に語り継がれる場所となったのは、別の要因による整備の継続も影響している。大村拓生氏の指摘（大村二〇一八）によればこれには次の二つの

要因があるという。一つは則祐期以降の山名氏との軍事的な緊張や、明徳の乱・応永の乱、応永三年（一四二七）の満祐家督継承時の混乱、嘉吉の乱などの軍事的緊張への備えのために断続的な整備が続いたことを挙げている。もう一つは守護在京以後の赤松の維持に、宝林寺・法雲寺などの禅宗寺院の存在があったことを挙げている。義則期に至り守護の在京が恒常化すると、赤松は徐々に守護の拠点機能が低下するが、その一方で守護の庇護を受け、京都とのネットワークを持つ法雲寺・宝林寺などの寺院が赤松の場を維持したというのである。つまり、武家の拠点形成という政治的な要素に、軍事的緊張や禅宗寺院という要素が加わることによって「赤松」の地は短期間のうちに埋もれず維持されたのである。そして、このような複合的な要素が、赤松の地が長く地域に伝承される素地をつくったとみるべきだろう。

### 二、遺跡としての赤松

#### (1) 西播磨の交通路と拠点



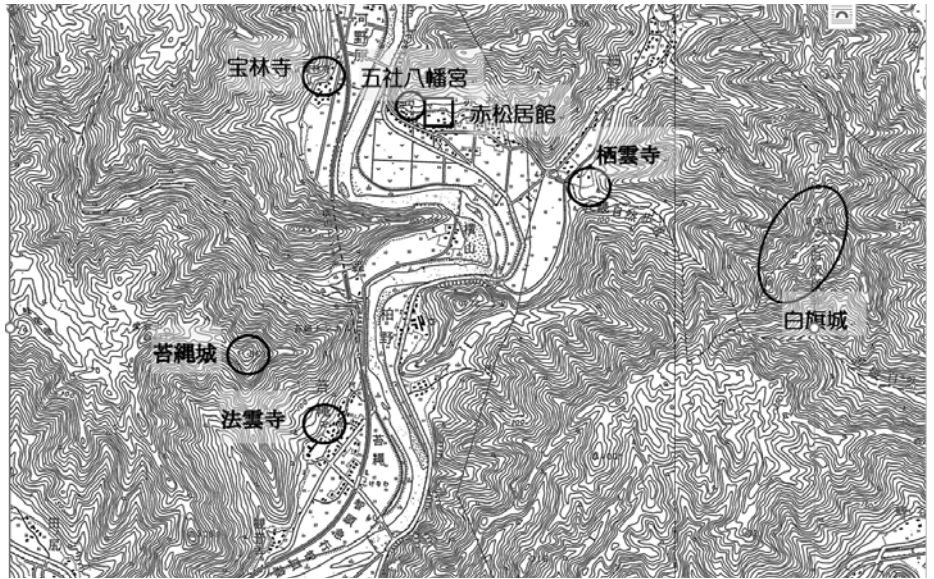


図2 赤松周辺位置図

交通路を確認しておきたい。

中世の西播磨において最も大きな役割を果たした交通路は瀬戸内海航路であろう。西播磨でこの広域航路のネットワークを支える港津として室津や坂越が知られている。

本節では考古学的な成果のある西播磨周辺の流通拠点について考古学的な成果を概観し、遺跡から見た赤松の評価を考えた。先ず、その前段として流通拠点が依拠する西播磨の

一方、陸路では榎原雅治氏が指摘するとおり古代官道を継承する山陽道が大きな役割を果たし、宿が経済的な拠点として機能した。榎原氏は中世の山陽道では「宿」地名が街道沿いに分布するが、特に播磨西部から備前東部にかけて稠密に分布し、この場合が流通経済の上で大きな役割を担ったという(榎原雅治二〇〇〇)。西播磨における宿遺跡では山野里宿遺跡(上郡町)・梨ヶ原遺跡(上郡町)・福田片岡遺跡(太子町)で調査成果が蓄積されている。さらに、榎原氏は播磨では横軸の山陽道に対して河川の水系が縦軸の交通路となり、地域間の交易路として機能したという。特に河川流域では舟運の役割が大きく、川津の存在が重要となる。この点について千種川流域では赤松上流の平瀬遺跡(佐用町)で川津の詳細が明らかになっている。

以上から千種川流域の流通拠点<sup>3)</sup>について紹介し、赤松の位置付けを考える。その上で、福田片岡遺跡を通じて揖保川・林田川流域との比較を検討したい。

## (2) 赤松

赤松周辺の土器様相については本書、中井氏・島田氏の論考に詳しいので詳細は省くこととした。ここで検討する遺跡は赤松居館跡・赤松遺跡・宝林寺遺跡の三遺跡である。このうち赤松居館跡では土器実測点数一〇四五点、土師器皿一〇三二点、備前焼播鉢三点、土師器煮炊具五点、瓦質風炉二点青磁香炉一点、その他四点で、土師器皿が大半を占める。赤松遺跡は土器実測点数八一点、土師器皿七七点、天目碗一点・青磁碗一点、備前焼甕二点となる。宝林寺遺跡は未整理のため数値化はできないが、やはり土師器皿が大半を占め、瓦質火鉢・香炉、備前焼播鉢・壺、青磁碗・瀬戸焼碗などが出土している。これらは一四世紀頃の物も含むが、一六世紀頃が中心になる。その他の遺物では小金銅仏（持仏）や篋書銘瓦などがある。

## (3) 個別遺跡

室津（たつの市御津町室津） 発掘調査では室津四丁目遺跡と室山城の調査がある。このうち室

山城は山城の調査で一六世紀を中心とするため今回の検討では省略する。室津四丁目遺跡は室津の町の調査で、一〇一〇一六世紀の遺構面が検出されている。一三〇一四世紀の遺物としては京都系土師器、備前焼や河内・和泉型の瓦質土器、大和型の火鉢、一四世紀後半の瀬戸焼などが含まれ、備前および畿内や東海などからの広域流通品の搬入が確認されている。特に河内・和泉型の瓦質土器や大和型の火鉢などは播磨ではあまり出土しないもので、都市的な場の特性を表しているといえる。<sup>4)</sup>

山野里宿遺跡（上郡町山里） 山野里宿遺跡は山陽道の宿遺跡である。千種川との結節点に位置するが、平成一九年の上郡町の調査において船着き場が検出され、川津であることも判明している。調査は平成一六年の兵庫県教育委員会の調査、平成一二年と同一九年の上郡町教育委員会の調査の三次の調査がある。これらの調査の年代は一四〇一六世紀初頭までの遺物を含むが、盛期は一五世紀後半一六世紀初頭とされる。平成一六年の兵庫県教育委員会の調査では、河岸に面して三〇棟の掘立柱建物が検出され、大量の土師器皿・椀が

投棄されると共に法雲寺と同文の軒瓦が出土した。報告書掲載の土器類の実測点数は六二二点で、このうち広域流通品が一八二点を数える。備前焼、瀬戸焼、常滑焼、中国産陶磁器、瓦質土器風炉・火鉢など多彩な産地の製品が含まれる。そして土器に占める土師器皿・碗の比率は六一・八%（三八五点）である。これは赤松に比べると低いが、他器種（広域流通品）の製品が多く含まれていることが原因と考えられる。平成一二年の調査では柱穴・井戸・土坑・溝などが出土し、備前焼、瓦質土器、土師器皿、青磁碗、瓦が出土し、法雲寺と同範の軒丸瓦が出土している。

平成一九年の上郡町の調査では室町時代の旧河道と柱穴が検出され、この旧河道に沿って前述の船着き場が検出された。土器は土師器皿・鍋・羽釜、瓦質土器羽釜・火鉢・風炉・火舎・茶釜・十能型土器、備前焼甕・壺・搦鉢・碗、中国産青磁・白磁と多岐に及ぶ。この調査でも法雲寺創建に伴う軒丸瓦が出土している。やはり土師器皿が多いが平成一六年の調査同様、広域流通品の比率が高いと推定される。さらに平成一九年度の調査では

瓦質土器の出土が際立った。特に瓦質土器の羽釜・茶釜・火舎などの喫茶に関わるものが多く含まれるが、これらは寺社の門前や都市的な場において一服一銭の茶を販売した製品と思われ、この遺跡が地域の流通拠点であったことを示す証左となる（橋本素子二〇一八）。

梨ヶ原遺跡（赤穂郡上郡町梨ヶ原）宿地名が残される遺跡で、平成四年度に圃場整備事業に伴って発掘調査が行われた。この遺跡は備前との国境である船坂峠から下った場所に立地する。調査の結果、一三世紀～近世にかけての集落が検出されたが、遺構の中心は一三世紀とされる。検出された遺構としては掘立柱建物三三棟、石組井戸一基、土壙墓などがあり、土師器皿や瓦質羽釜などの土器のほか、備前焼小壺・甕・搦鉢、瀬戸美濃焼黒釉碗、中国産青磁香炉・碗などが出土する。ただし、検出された建物は大抵が二～三間規模のもので、柱の並びや通りは良好なものとはいえない。土器では土師器皿が比較的豊富であるが広域流通品は少ない。ただ、備前焼片口小壺、瀬戸焼黒釉碗、青磁香炉の出土や、小規模建物が密集する点



からは宿としての特徴を見ることが出来る。

福田片岡遺跡（たつの市誉田町福田） この遺跡は鶴宿に比定され、鎌倉時代に新たに山陽道として建設された筑紫大道が遺跡の中央を通る。一方、西側は揖保川支流の林田川に面しているため川津の機能も併せ持った遺跡と考えられる。遺跡の範囲は南北三〇〇m、東西二〇〇m以上に及ぶ。

遺跡全体は長期間にわたって集落が営まれるが、一四世紀の段階（期）では遺跡中央に周囲を区画溝で囲んだ満願寺と呼ばれる寺院が建つ。この敷地を踏襲して一五世紀には居館が築かれる。

この遺跡から出土した生活用品には威信財も含まれるなど、当地が地域流通の要衝にあったことを教えてくれる。出土遺物には一二世紀、一四一五世紀の二時期に盛期があり、遺物量は膨大で土師器皿・煮炊具（播磨型埴）、瓦質土器火鉢・風炉、備前焼、瀬戸焼、貿易陶磁器などが出土している。中でも貿易陶磁器二〇〇〇点（破片点数）や瀬戸焼、常滑焼などの東海系陶器の出土、さらに豊富な備前焼の出土などからは一般集落とは異なった様相が窺える。報告書の土器類実測点数は

一五四六点、この内土師器皿四九七点（三二％）、広域流通品六三一点（四一％）となる。またこれらの内、貿易陶磁器は中央の居館部などに偏在するのではなく、遺跡全体から出土するという。このような出土傾向は本遺跡が都市遺跡の様相を持つことを示しているといえるだろう。

遺跡は広範な広がりを持つが、さらに遺跡の北



図3 福田片岡遺跡（兵庫県教委 1991に加筆）

側には一三世紀の福田天神遺跡があり、青磁など豊富な中国磁器の出土が知られる。また、川の対岸は弘山荘となるが、ここには



弘山御所があったとされる。このような御所の立地も揖保川流域の豊かな物流に依拠した経済性との関連が推測される。

平瀬遺跡（佐用町円光寺平瀬） 平瀬遺跡では発掘調査によって川津の存在が明らかになった。

この遺跡はその名の通り蛇行した河川の「瀬」に立地する川津で、一三〇一七世紀にかけて存続した。調査によって遺跡からは五〇棟の掘立柱建物が出土している。川の対岸には、村名となった円光寺が赤松氏の外護のもと創建されている。

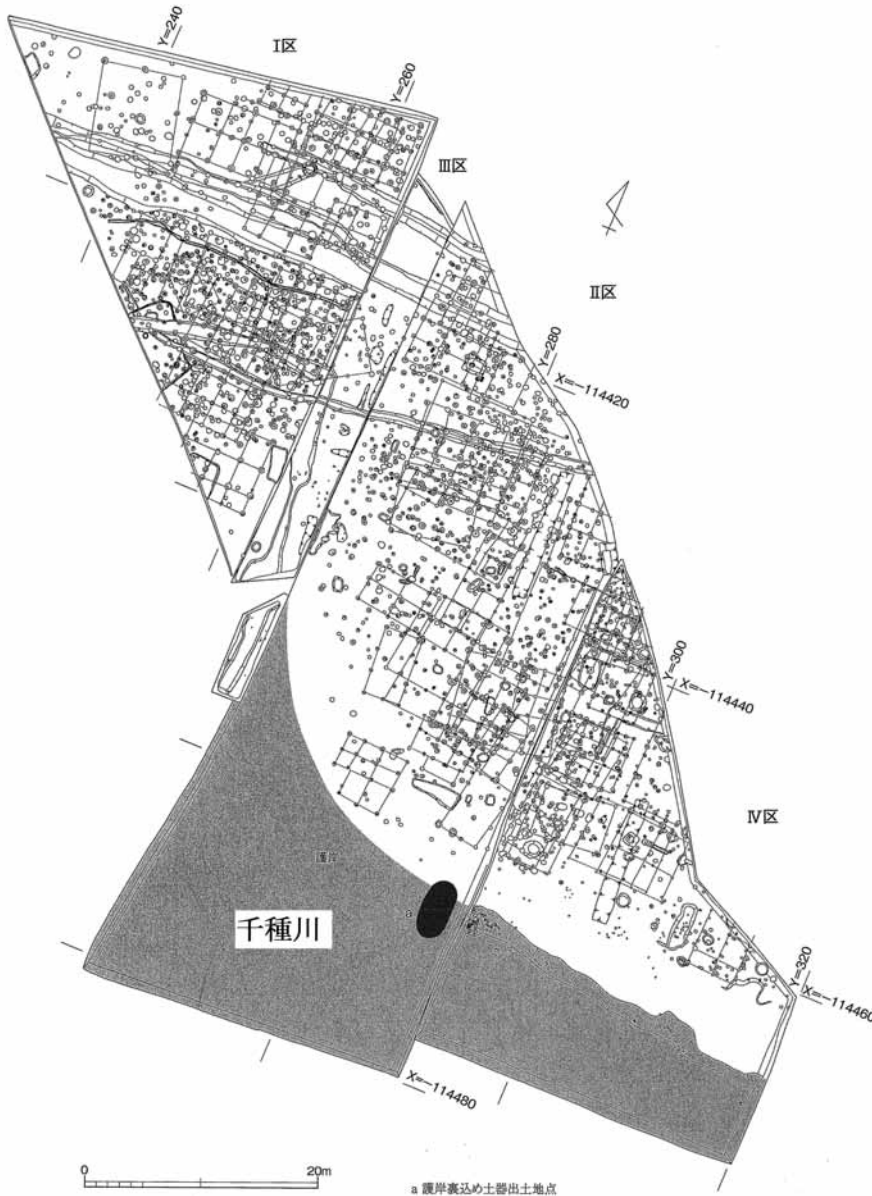


図4 平瀬遺跡（兵庫県教委 2008）

また、元和元年（一六一五）に上月村と円光寺村に高瀬船七艘の常備が定められている（『間嶋家文書』）。平瀬遺跡は少なくとも元和年間前後まで存続しているため、千種川流域にあって高瀬舟が置かれた場所は、この平瀬遺跡であろう。一方、高瀬舟は上流の上月と下流の久崎にも置かれたので、二km前後の間隔で川津があった。このことからすると赤松にも川津が存在した可能性があり、おそらく、このような川津が山野里 赤松 平瀬を結び千種川の物資流通の中継

点となっていたことが推測される。

この遺跡からの遺物の量は検出された遺構のわりに僅少（平成一一・一二年度調査、土器類実測点数一八八点）である。恐らく遺構面及び包含層が開墾などによって削平されたことが影響するのだろう。調査は平成一一・一二年度の兵庫県教育委員会の調査と昭和五九年度の佐用郡教育委員会の調査がある。佐用郡教育委員会の調査では一三世紀前後の成果が見られ、兵庫県教育委員会の調査では一四〜一五世紀を中心として、一六〜一七世紀初頭の遺構がわずかに出土している。調査地点からみると一三世紀は川岸から離れた山裾に集落が立地し、一四世紀以降は川岸に集落が移動したとみられる。

遺物群では千種川の川岸から出土した備前焼甕・壺、中国産の天目碗、などがあるものの貿易陶磁器などの広域流通品は少量で、器種組成も単純である。建物群が密集する構造をもつものの山野里宿遺跡・赤松に比べて簡素と言わざるを得ない。

#### （4）流通拠点と赤松

次に、各遺跡について土器組成から比較を試みる。ただし、梨ヶ原遺跡については数量的な比較ができないので割愛した。先ず、各遺跡の時期を確認しておきたい。山野里宿遺跡は一五世紀後半〜一六世紀初頭に時期の中心があり、赤松は赤松居館が一四世紀、赤松遺跡が一五世紀、宝林寺遺跡が一四〜一六世紀、平瀬遺跡は一五世紀に中心がある。このように遺跡ごとに時期的な幅や差があり、一律に比較することは厳密には困難である。ただし同一流域で連動した関係にある川津という遺跡の性格からすると、少なくとも一四〜一五世紀の期間、つまり前期赤松氏の時代にこれらの三遺跡が存続したことは疑いがない。このため本稿では遺物の組成や遺物量に大きな変動がないことを前提に検討を行ないたい。ただし、この作業はあくまで暫定的な検討であることを前置しておきたい。<sup>4</sup>比較に当たっては、土器量の多寡、器種のバランス、（供膳具・調理具・煮炊具・貯蔵具などの各器種が揃っているかどうか）、広域流通品の量の三点を対象として比較する。

先ず、山野里宿遺跡であるが、土師器皿が豊富に出土しており量的には圧倒する。供膳具（土師器皿）・調理具（備前焼播鉢）・煮炊具（土師質・瓦質）・貯蔵具（備前焼甕）などがあり各器種が揃っている。は貿易磁器・瀬戸焼などが多く、中でも瓦質土器に特徴が見られ、風炉 火舎・茶釜などの喫茶に関わる土器類が多く含まれる。この点は前述の通り都市的な要素と見ることができ流通拠点の特徴と考えられる。

続いて赤松は、土師器皿が赤松氏居館・赤松遺跡・宝林寺遺跡とも多いが、その他の器種はどれも量的に少量で偏りがある。器種組成では調理具・煮炊具・貯蔵具などが少量である。では宝林寺遺跡で備前焼・貿易陶磁などが比較的目立つが、これも山野里宿遺跡に比べると数は少ない。最後の平瀬遺跡では、土器の数が少ない。供膳具・調理具・貯蔵具とも少ない。広域流通品も中国産天目碗などが出土するものの例外的である。などとなる。

つまり、山野里宿遺跡 赤松 平瀬遺跡の順番で出土土器の量や組成が減退しているといえる。

その上で赤松の評価を考えると、赤松では山野里宿遺跡の広域流通品の搬入範囲から逸脱した特徴は見られない。もちろん、赤松にも川津が立地し、千種川の河川交通の一翼を担っていたことが推測されるが、宝林寺などから出土した遺物群を見る限り、地域内で消費される土器が多くを占めている。その比率から見ると赤松は山野里宿遺跡の流通網の下位に位置する消費地といえるだろう。

次に、同様に揖保川流域の福田片岡遺跡と山野里宿遺跡を比較する。福田片岡遺跡では全体の土器類の量や貿易陶磁・備前焼などの広域流通品が大量に出土している。さらに、備前焼でみると、期の製品が出土するなど、この場所が早くから備前焼の供給を受けていたことがわかる。つまり備前に隣接する千種川流域よりも早くから供給が始まっているのである。大半が一五世紀からの製品で占められる山野里宿遺跡とは大きく異なる。つまり、これは揖保川流域の流通ネットワークの動向が反映するもので、古くからその規模が千種川流域を遙かに凌いでいることが推測される。結局、以上から見ると守護による赤松への物資流通



や集積は、西播磨における既存の経済動向を左右するほどの動きにはつながらなかったと評価できる。

ただ、そうではあっても千種川流域でみるならば赤松を含め円光寺（平瀬遺跡）などの拠点の開発は、地域流通に大きく貢献したであろうことを否定するものではない。下東由美氏の指摘の通り居館や寺院の造営にあたって材木などの物資輸送が実施されるには人・物のかなりの動きが想定され、さらに寺院の維持などにも多くの消費財が千種川を行き来したことが想定されるからである（下東由美二〇〇七）。今後は考古学的な資料の蓄積を待つて、西播磨地域の流通ネットワークについて検討する必要があるのだろう。

### 三、白旗城・城山城の調査

#### （一）調査と概略

白旗城・城山城の調査活動は以下の通りである。先ず、平成二八～三〇年まで行なわれた発掘調査に併行して白旗城の現地調査、令和二・三年度に

は城山城の現地調査を実施した。以上の成果を通じて両城の再評価を実施したものである。

調査にあたって、城山城では内托土塁線と亀山山頂の横堀周辺および平坦地群、白旗城では侍屋敷と呼ばれる平坦地群を重点的に踏査した。なお、両城の評価については既にいくつかの論考で明らかにしたとおりである。このためここではこれまでの成果を整理し概略を述べることとしたい。

#### （二）城山城の調査

城山城（たつの市新宮町下野田・馬立など）は嘉吉の乱（嘉吉元年、一四四一）によって滅びた赤松満祐の詰城であるが、一九八六年頃に義則敏彦氏の精力的な研究によって同じ場所に古代山城が重なることが明らかされ、神護石系山城（義則敏彦二〇〇七など）であることが明らかになった。古代城山城の確認された遺構は、「門の築石」である唐居敷、石塁遺構、山頂の東南から東側にかけて伸びる幅二～三mの内托土塁（城壁ライン・周長約一・六km）などがある（向井一雄二〇〇一）。ただし、内托土塁は部分的に崩落などによる消滅

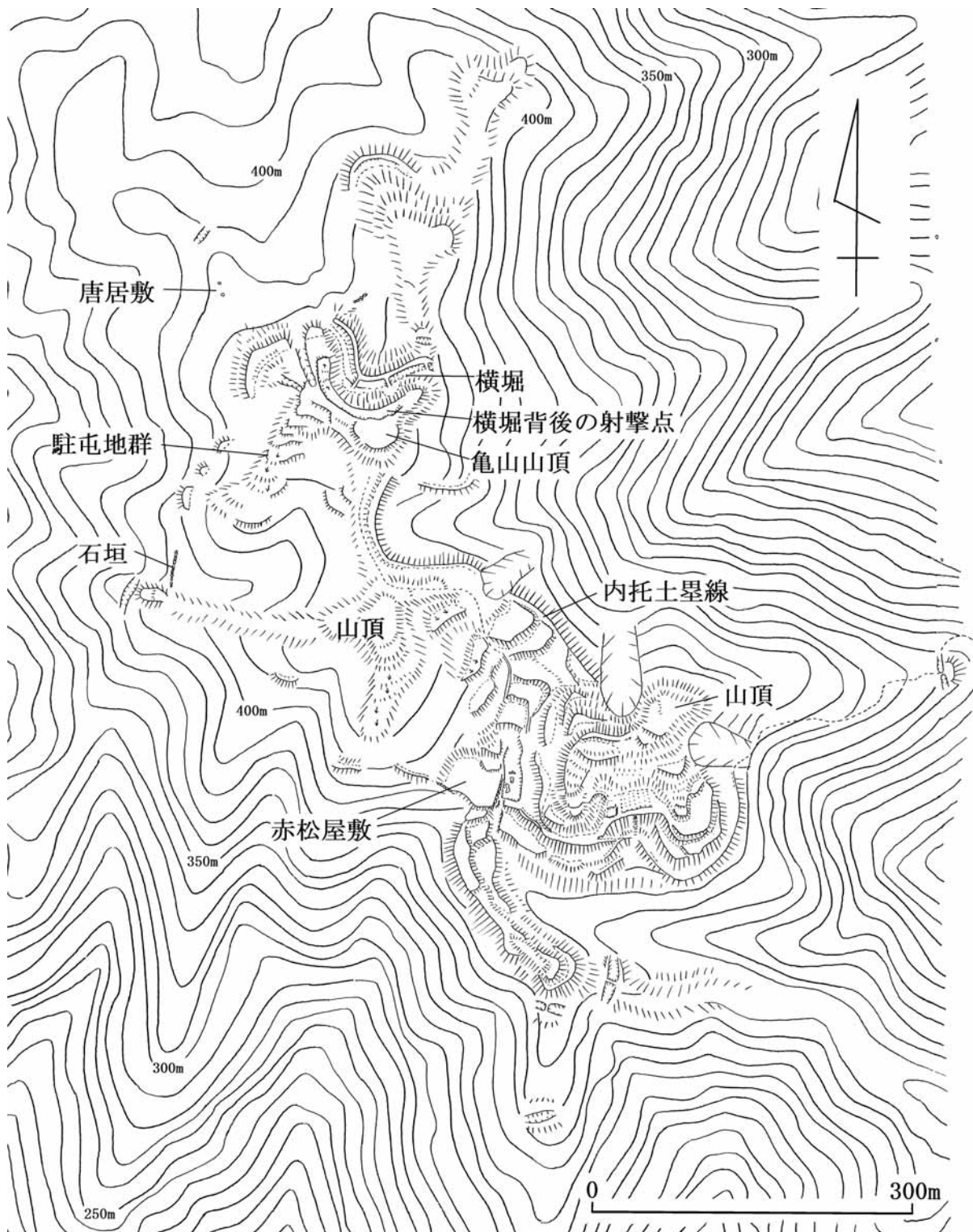


図5 城山城城縄張図（山上雅弘作成）

と、もともと構築されていない部分などがあると思われ、多くの部分で欠落が確認されている。この城が文献に登場するのは山城廃城後で、貞和四年（一三四八）成立の『峰相記』に天徳年中（九五五〜九六〇）に群盗が城を築いたというものや、貞治元年（一一三六二）の「城山本堂修造」の記事（『東寺百合文書』）というも

のなどがある。

中世の城山城は観応二年（一三五二）、赤松則祐が播磨守護となり築城（中世山城）が開始される（教王護国寺文書・東寺百合文書）。この築城は貞治二年（一三六二）に開始される麓の越部守護屋形の建設と共に、文和元年（一三五二）～明徳元年（一三九〇）と、応安三年～明徳元年（一三七〇）～一三九〇）の期間まで継続したことが知られる（村田修三一九八七）。これに伴って徴発された人夫には城誘・倉作人夫など専門の職掌に関わるものが含まれ本格的な築城であったとされる。その後も応永三四年（一四二七）に城の整備が行われるなど、当城は室町期前半の赤松家にとって重要な拠点として維持された。中世の城山城が終焉を迎えるのは嘉吉元年（一四四一）の嘉吉の乱で、赤松氏の滅亡に伴ってである。

中世の城山城については一九九〇年前後に村田修三氏（村田一九八七）・角田誠氏（角田一九九〇）らによって簡易な粗塞群とされ、南北朝期～室町時代前半の基本プランをそのまま残した貴重な山城とされてきた。しかし、これは古代山城の

構造がまだ周知されていない時期の評価であった。

そこで筆者は古代山城を踏まえて中世山城を考える視点から再評価を行なった（山上二〇〇九）。

この再評価によって城山城が本格的な築城を行うと共に、囲郭構造を持った大規模で恒常的な城であることを示した（山上二〇〇九・二〇二〇ほか）。

ちなみに一四世紀代のこういった大規模横堀については笠置山城（奈良県五條市）の堀切や吉田住吉山城跡（兵庫県三木市・兵庫県教委二〇一一）などが近年、明らかになってきている。また、天文年間の尼子氏による播磨侵攻時の城山城は、太子町と姫路市の境にある太田の城山とする山下輝誉氏の見解によって（山下輝誉二〇〇八）、見直しが必要と筆者は考えている。

さらに当城の居館とされる赤松屋敷周辺からは大量の中国産磁器や備前焼・瀬戸焼などの陶磁器を含む遺物が採取されている。これらの遺物は一四～一五世紀前半のものが大半で、赤松氏築城の城山城に由来することは明らかである。このためこの周囲の平坦地は由来が寺院であったとしても、



現在の規模に拡張されたのは築城に伴うものであることは疑いが無い。

今回の調査は、横堀について背後の射撃点となる場所の平坦地を明らかにしたこと。さらに亀山周辺の不連続な駐屯地群（段状遺構）を明らかにした点などがある。これらによって赤松屋敷周辺の中心部に対して、亀山周辺にも独立した陣所群が構築されたことを明らかにした。

### (3) 白旗城の調査

白旗城（赤穂郡上郡町赤松など）は白旗山（標高約四四〇m）周辺に築かれた山城で、城域は東西約三五〇m、南北約八五〇mに及ぶ播磨最大規模である。築城は建武三年（一三三六）一月、播磨に侵攻した新田義貞を迎え討つために築かれたとされるが、当初は赤松城と呼ばれていた。その後、赤松氏によって断続的に維持・整備されるが、嘉吉元年（一四四一）嘉吉の乱の時にも築造が行なわれたという。最後は、永正一七年（一五二〇）三月、守護赤松義村が美作攻めのために赤松に入った（「鵜庄引付」斑鳩寺文書）とするもので、こ

れ以降の文献には登場しない。また、採取されている遺物もこの時期のものが最も新しい。

白旗城は本丸・二の丸周辺を中心とするが、外縁部は簡易な構造となり、主郭周囲との造成の落差が大きい。一方、表採されている遺物の多くは侍屋敷および谷中の造成段（上郡町一九九八では大手郭と呼称）のもので、一五世紀のものが多いという（上郡町教委一九九八）。侍屋敷は平坦地前面に石積みを構築し土留めとすること。内部には立石や石列が見られ、瀬戸焼（花瓶を含む）・備前焼壺・播鉢、中国産青磁碗などの遺物が表採されている。さらに侍屋敷の谷中の造成段についても前面に土留めの石積みが構築され、一五世紀代の備前焼播鉢などが採取されている。これらのことから、侍屋敷および谷中の平坦地群には恒常的な屋敷の構築が推定される。

今回の調査は山城の遺構について現地を確認するものであった。その結果、立石・石列・石積みなどや遺物の散布などが確認され、以前の調査を追認する結果となった<sup>(5)</sup>。以上から城山城同様に白旗城でも恒常的な屋敷を築造した可能性があるこ

とがわかった。

#### 四、さいごに

赤松の場について考古学的な成果から位置づけを探ると共に、前期赤松氏の築城についてこれまでの調査を検証した。

前者では文献の成果を離れて考古学的な遺物動向から赤松を考えた。この結果、赤松の遺物組成や土器量は上流の平瀬遺跡よりは優越するものの、千種川流域の中で突出した内容を持つものではなく、山野里宿遺跡の流通網の下位に位置づけられる消費地と考えられた。(もちろんこれは武家や寺院上層階層ではなく地域流通にける比較においてである。)そして、このことからわかるのは守護による政治的な拠点形成によって赤松が突出した消費地にはならなかったということである。一方、中流域にあった山野里宿遺跡は遺物から見る限り千種川流域ではもっとも都市的な様相を持ち、流通拠点として機能したことが裏付けられた。交通網の動脈を軸とする古代以来の交通路に依拠し

た流通が、政治権力の拠点形成を飲み込む形で動いていたことを示す事例といえるだろう。一方、同じ西播磨の揖保川・林田川の流域にある福田片岡遺跡は、この点においてさらに突出しており、千種川流域に対して揖保川・林田川流域のほうがより経済性が高いことを確認した。

この意味で赤松氏が南北町期～室町時代前半にかけて整備した赤松は守護役を背景に物資集中が行なわれたが、その規模は既存の流通を凌駕することはなかった。逆に言えば政治的な守護役による物資集積は既存の流通ネットワークに変更を迫るほどのものではなかったといえるだろう。

一方、前期赤松氏の築城では、城山城が困郭構造を持ち、恒常的(蔵が存在)な施設を保有すること。白旗城が外縁部において粗塞的な構造を展開するものの、侍屋敷に恒常的な施設(屋敷)を持つことを明らかにした。いずれにしてもこれらによって前期赤松氏は恒常的な構造をもった山城を築城、維持したことが確認され、軍事的な側面を色濃く保持する守護大名として評価すべきであることがわかった。

(1) 高坂好氏の研究は一九九一『中世播磨と赤松氏』、藤本哲氏は一九七八『赤松物語播磨燃える』などに詳しい。

(2) 小島道裕一九九三『戦国城下町から織豊期城下町』『年報都市史研究』、前川要二〇〇〇『日本中世後期の地域支配体制論序説』日本史研究会三月例会など  
(3) 流通拠点のほか政治的・宗教的な拠点の対象としたいが、今のところ比較事例がない。  
(4) このような作業も現時点では地域間の概要を把握する上で一定の役割を持つと筆者は考える。  
(5) ただし、井戸や庭園の存在も指摘されるが、これについては今後の検討が必要と考える。

【引用・参考文献】

松山宏一九八二『守護城下町の研究』大学堂書店  
日本考古学協会新潟大会一九九三『守護所から戦国城下へ 地方政治都市論の試み』  
守護所シンポジウム@岐阜二〇〇四『守護所戦国城下町を考える』  
守護所シンポジウム@清須二〇一四『新・清須会議』  
榎原雅治二〇〇〇『日本中世の地域社会の構造』校倉書房  
小林基伸二〇〇六『赤松氏の権力と拠点』（大手前大学史学研究所紀要）六  
下東由美二〇〇七『守護役と地域の流通 守護赤松氏を事例に』『中世の内乱と社会』東京堂出版

山田徹二〇二二『室町期荘園制と「守護所」』（『中世後期から近世初頭における武家拠点形成の研究』）

松岡秀夫一九八一『白旗城』『苔縄城』（『日本城郭大系第一二巻』新人物往来社）

松岡秀夫一九八二『白旗城』『苔縄城』（『兵庫県の中世城館・荘園調査』兵庫県教育委員会）

多田暢久一九九九『白旗城』『赤松居館』『苔縄城』（『上郡 町史 第三巻 史料編一』上郡町）

山上雅弘二〇〇六『赤松』『守護所シンポジウム@岐阜二〇〇四』『守護所戦国城下町を考える』資料集

荻能幸二〇一七『苔縄城』『白旗城』（『図解 近畿の城郭』）  
二〇一六『赤松居館』同上『戎光祥出版』

大村拓生二〇一七『赤松氏の拠点形成 白旗城・法雲寺・宝林寺』（『大手前大学史学研究所紀要』一一）

大村拓生二〇一八『在京守護期の赤松地区と禅院の諸相』（『ひょうご歴史研究室紀要』三）

大村拓生二〇二〇『南北朝期赤松一族の動向と赤松地区』（『ひょうご歴史研究室紀要』五）

島田拓二〇一七『上郡町域赤松氏関連遺跡の調査成果』（『兵庫歴史研究室紀要』一一）

島田拓二〇一九『赤松居館跡の発掘調査成果について』（『兵庫歴史研究室紀要』四）

上郡町教育委員会一九九八『国指定史跡赤松氏城跡 白旗城跡』

上郡町教育委員会二〇二二『赤松居館跡1』  
上郡町教育委員会二〇二二『赤松遺跡1』



- 兵庫県教育委員会二〇一一 『山野里宿遺跡』  
 橋本素子二〇一八 『中世の喫茶文化』 吉川弘文館  
 兵庫県教育委員会一九九一 『福田片岡遺跡』  
 上郡町教育委員会一九九二 『梨ヶ原宿遺跡発掘調査実績  
 報告書』  
 兵庫県教育委員会二〇〇八 『平瀬遺跡』  
 長濱誠司ほか二〇一一 『室津四丁目遺跡』 兵庫県教育委  
 員会  
 新宮町教育委員会一九八八 『城山城』  
 村田修三一九八七 『城山城』 『中世城郭事典二』  
 角田誠一九九〇 『近畿地方における南北朝期の山城』  
 （『中世城郭研究論集』）  
 向井一雄二〇〇一 『古代山城研究の動向と課題』（『嘩漚』  
 九・一〇合併号 古代山城研究会）  
 義則敏彦二〇〇七 『城山城』（『第八回播磨考古学研究集  
 会城館から見た中世の播磨』）  
 山下晃誉二〇〇八 『天文前期の播磨における尼子氏勢力  
 の動向』（『年報赤松氏研究 創刊号』）  
 山上雅弘二〇〇九 『中世山城「播磨城山城」再論』（『西  
 国城館論集 河瀬正利先生追悼論集』）  
 山上雅弘二〇一一 『中世播磨城山城』（『特別展城山城』  
 たつの市埋蔵文化財センター）  
 兵庫県教育委員会二〇一一 『吉田住吉山遺跡群』